

Title	『ドイツ啓蒙主義研究』(1号〜21号)掲載論文一覧
Author(s)	
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2025, 22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102995
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ドイツ啓蒙主義研究』(1号~21号)掲載論文一覧

第1号(2001年3月)

啓蒙とは何か (津田保夫)

- 一『ベルリン月報』誌上の議論を中心に 一
- C.F.ブレーマーの詩学をめぐって(福田覚)
 - ― 模倣説の復権と新たな想像力概念の模索 ―

ケンペル『日本誌』と編者ドーム(中直一)

一「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに 一

第2号(2002年3月)

「フリードリヒの世紀」と自由 (斉藤渉)

- カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法 —(前編)
- ドイツ啓蒙主義における「人間の使命」の問題(津田保夫)
- ― シュパルディングの『人間の使命』とその影響 ―

社交術と「啓蒙」(中直一)

一 クニッゲ『人間交際術』にみられる処世と啓蒙の関係 一 クリスティアン・ヴォルフの心理学における「想像力」(福田覚)

第3号(2003年4月)

エルンスト・プラトナーの『医師と哲学者のための人間学』(津田保夫)

- 一 後期啓蒙主義における新しい人間観とその学問の試み 一 快感情の起源をめぐるJ.G.ズルツァーの考察 (福田覚)
- アカデミー論文(1751/52)についての覚え書き ―

「フリードリヒの世紀」と自由 (斉藤渉)

カント『啓蒙とは何か』とプロイセン一般ラント法 —(後編)

第4号(2004年5月)

エルンスト・アントン・ニコライの想像力論について (福田覚)

シラーの『生理学の哲学』における心身問題 (津田保夫)

- 一 その中間力構想と神経精気論の思想的背景 一
- フリードリヒⅡ世における公正の観念と司法の独立(中直一)
 - アルノルト訴訟事件に関するドームの報告より

第5号(2005年5月)

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(1) (中直一)

一 ビースターおよびニコライの文書より 一

「知識人共和国」は何語で話すか (斉藤渉)

- 一 プロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者 一(前編)
- ベルリンのズルツァー (福田覚)
 - 一 その生涯と活動の振幅をめぐる素描 一

第6号(2006年5月)

ズルツァーの美学事典の体系性をめぐって (福田覚)

- 一 事典形式と理論的な体系性についての予備考察 一
- ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(2) (中直一)
 - 一 ニコライおよびクラインの文書より 一

「知識人共和国」は何語で話すか (斉藤渉)

一 プロイセンの啓蒙主義とフランス系入植者 一(後編)

第7号(2007年5月)

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(3) (中直一)

ゲッキングおよびグローナウの文書より

陶冶の概念としての模倣 (福田覚)

ードイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のために ー 啓蒙主義者たちの大学廃止論 (斉藤渉)

第8号 (2008年5月)

ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について(4) (中直一)

一 シュテルツェルおよびニコライ旧蔵の文書より 一

連想と連関の概念としての模倣 (福田覚)

- ードイツ詩学史の再記述と模倣の問題圏の拡大のために ー 「現在を軽蔑する権利がない」(多賀健太郎)
 - 一 啓蒙とダンディズム 一

第9号(2009年5月)

Logik als "Vernunftlehre" (Sho Saito)

— Reimarus, Engel und W. v. Humboldt —

情動論から捉え返した詩学史記述の可能性 (福田覚)

一 初期啓蒙主義の「修辞学的」側面のその後を追うために 一 ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道(前編) (中直一)

第10号(2010年5月)

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道(後編) (中直一) フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動 (福田覚)

一「「文化的」性道徳と現代の神経失調」を中心に 一

教育の公事化 (斉藤渉)

─ フリードリヒ2世の文教政策についての覚書 ─

第11号(2011年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(1) (中直一)

一 総説及び第1巻の分析(その1) -

ドイツ初期啓蒙主義の情動論をめぐって (福田覚)

一 ヴォルフ、ウンツァー、マイアーが示す学際的な振幅 一

Zu den Quellen der phonetischen Umschrift

in Abel-Rémusats Élémens de la grammaire chinoise (1822) (Sho Saito)

第12号(2012年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(2) (中直一)

- 第1巻の分析(その2) -
- I. J.ピューラをめぐる記述課題の諸断面 (1) (福田覚)
 - 一 敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念 一

Die Universität in dürftiger Zeit (Sho Saito)

第13号(2013年5月)

ドームによるケンペル『日本誌』の編集について(3) (中直一)

- 第1巻の分析(その3) -

医学者 E.A.ニコライの「情念」と哲学者ズルツァーの「感情」(福田覚)

- 一 ドイツ啓蒙主義詩学史の学際的理解の試み 一
- 18世紀の文学外的フィクション (斉藤渉)
 - 一 パラテクストの分析 一

第14号(2017年5月)

ユング=シュティリングにおける信仰と創作(長谷川健一)

―『ヨリンゲルとヨリンデの話』を手がかりに ―

徳の教育 (廣川智貴)

- Ch・F・ゲラート『スウェーデンの G 伯爵夫人の生涯』 —
- 18世紀の自死をめぐる言説の再検討 I (吉田耕太郎)
- J.E.シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォクレス」(福田覚)
 - 一 受容の2つの局面から考える詩学史の物語論的再解釈 一

第15号(2018年5月)

汎愛派の知られざる教育者J·K·ヴェツェル (廣川智貴)

嬰児殺しをめぐる言説の再検討 I 論争の背景 (吉田耕太郎)

レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における父の規範と娘の葛藤 (福田覚)

― 両価的感情の物語表現として見た悲劇の構図 ―

第16号(2019年5月)

道徳週誌『画家談論』における想像と模倣(福田覚)

- 一 スイス派初期の作用詩学について 一
- ユング=シュティリングの敬虔主義批判 (長谷川健一)
 - エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』
- アルプスを見る詩人 (廣川智貴)
 - ー ヘルダリーンとエーベル ―
- 18世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容について(吉田耕太郎)
 - 日本の盲人についての情報とその流布を例に

第17号(2020年7月)

文学論争におけるクロップシュトックの評価 (福田覚)

一 文学論争の再考にむけて 一

ヴェツェルとウィーン (廣川智貴)

一『喜劇役者たち』を中心に 一

神童と天才 (吉田耕太郎)

一 18世紀における心的能力をめぐる議論をたどる 一

第18号(2021年5月)

文学論争以前のミルトンをめぐる遣り取り (福田覚)

一 文学論争の再考にむけて(2) ―

ユング=シュティリングの「熱狂」評価 (長谷川健一)

- 『テーオバルトあるいは熱狂者たち』(1784/85)を手がかりに -

ヴェツェルの教育論と『ロビンソン・クルーソー』 (廣川智貴)

優しい父 (吉田耕太郎)

一 親子関係から啓蒙を再考する 一

第19号(2022年3月)

『批判的論叢』24 号におけるミルトン批評の言説 (福田覚)

一 文学論争の再考にむけて(3) ―

対話小説への道 (廣川智貴)

— J・J・エンゲルの理論と実践 —

野生児をめぐる18世紀の緒言説 1 (吉田耕太郎)

一 言説の付置の確認 一

第20号(2023年7月)

ユング=シュティリングの「熱狂」評価(承前) (長谷川健一)

- ─ 『テーオバルトあるいは熱狂者たち』(1784/85)におけるテルステーゲン評価を手がかりに ─ ミルトンから見て取る虚飾的表現と絵画的表現 (福田覚)
 - 一 文学論争の再考にむけて(4) 一

野生児をめぐる18世紀の緒言説 2 (吉田耕太郎)

一 動物と人間の顔 一

第21号(2024年7月)

カント啓蒙論における歴史的進歩について (八木緑)

- 一 歴史の中での実践に関する一考察 一
- 病へ向けられたまなざし(吉田耕太郎)
- 一 家長の指南書 Hausvaterliteratur と病をめぐる情報の分析 一 詩論における虚飾の評価とロンギノスへの視線 (福田覚)
 - 一 文学論争の再考にむけて(5) ―
- ユング=シュティリングの『アーゼ=ナイタ』について(長谷川健一)
 - 一もう一つの「ヨセフ物語」